

## 「思い」への気づきが生活を変える？ ——1人の脳性麻痺者の語りを通して——

作業療法士学科夜間部

### 【背景】

2015年介護報酬改定により身体機能に偏らず、活動や参加に焦点を当てたりハビリテーションを徹底させることを目的に新たな報酬体系が導入された。また、障害福祉制度においても多様なニーズに対応するため改訂が行われ、現在作業療法士が障害福祉領域に配置されつつある。

一方、脳性麻痺者への治療の現状は、乳幼児期の療育に傾きすぎ、成人期での治療はまだ不十分であるとされている。また成人期の治療の多くは二次障害の予防といった身体機能面へのアプローチが中心となっている。

### 【対象および方法】

生活介護施設の利用をきっかけに、主な生活での移動手段が車椅子から杖歩行になった脳性麻痺者1名を対象に半構造化面接を実施した。その際、面接内容を許可を得て録音する。データを基に逐語録を作成し内容分析を行った後、量的に検討する。

インタビュー内容は、先行文献<sup>1)</sup>を参考に「人生の転機の出来事」「過去・現在・未来の生活」等について尋ねた。このように、当事者の経験や思いを語ってもらい分析することで、成人期における作業療法のあり方を考察することを目的とした。

本研究は大阪医療福祉専門学校倫理審査委員会の承認を得て実施し、承認番号は『大医福 第17教—17号』である。

### 【結果】

- ①生活の変化：【母に依存した生活】が歩行獲得により【母からの自立】に繋がった。
- ②杖歩行獲得の経緯と心理的变化：転倒経験を期に怖くなり歩行を諦めていたが、杖歩行をする【きっかけ】を作ると、今まで出来ないと思っていた杖歩行を獲得できた。このように、本当は歩行できるだけの能力は持っていたが「環境」によって発揮できていなかったことが分かった。自分の能力に【気づき】、「～してみたい」「やってみます」と【自己実現】に向け生活への姿勢が変化したことが分かった。
- ③「人生を語る」ことで「出来ないことが当たり前」で【諦め】があったが、本当は「手を借りず一人で歩きたかった」思いや、【いつも側にいた母の存在】に

気づき感謝の気持ちが語られた。はじめは答えられなかった【人生の転機である出来事】にも気づき、語り がまとまった。

また面接で話された内容の割合は、自分自身の経験や思い 47%、母親に関すること 40%、感謝・気づき 12%、父親に関すること 1%であった。

### 【考察】

これまでの脳性麻痺者に対するアプローチは身体機能面中心であり、当事者も身体機能面に着目する傾向があることが先行研究によって明らかになっている。今回、当事者の語りを通して「気づき」があったことが生活に変化をもたらせたと考える。

また、対象者に他者の手を借りながら「人生を語る」ことで【思い】に【気づく】ことが第一に重要であり、心理的变化の過程に【きっかけ】【自信】【母からの承認】【気づき】【余裕】が挙げられ、このような要素が与えられるように関わる事で自己実現に繋がると考えられた。

### 【まとめ】

現在、活動や参加に焦点を当てた作業療法が求められている。大松ら<sup>2)</sup>は、対象者に考え方や生活史について語ってもらうことは意味ある作業を引き出すきっかけになるとされている。本研究では、インタビュー形式で実施した結果、諦めていた思いやいつも側にいた母の存在に「気づき」感謝と今後の生活への希望を語った。人生を物語ることで「気づき」となり将来の生活の変化の一助になると考えられ、作業療法を適切に提供するための手段として有効であることが示唆された。

### 【文献】

- 1) 大久保孝治『ライフストーリー分析—質的研究調査』。学文社。2009, 17-28.
- 2) 大松慶子, 石井良和・他: 我が国における意味のある作業と意味のある作業以外の作業の特徴—1995年から2010年の事例検討。作業行動研究. (17), 2014, 211-220.